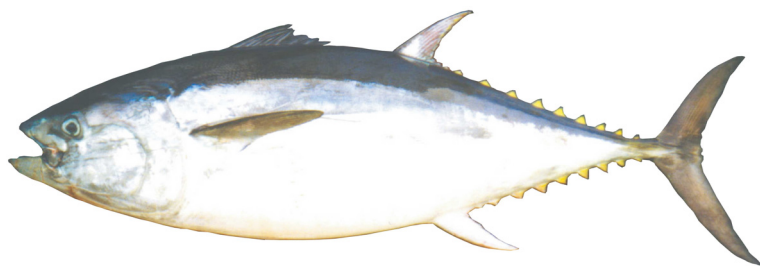


ミナミマグロ

Southern Bluefin Tuna, *Thunnus maccoyii*



管理・関係機関

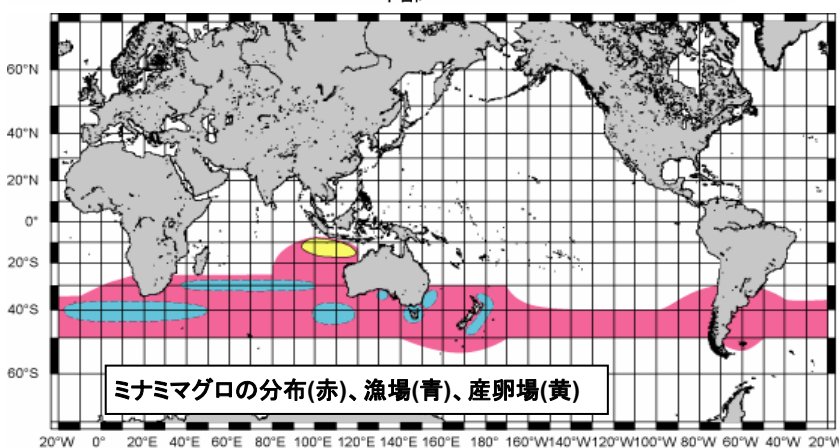
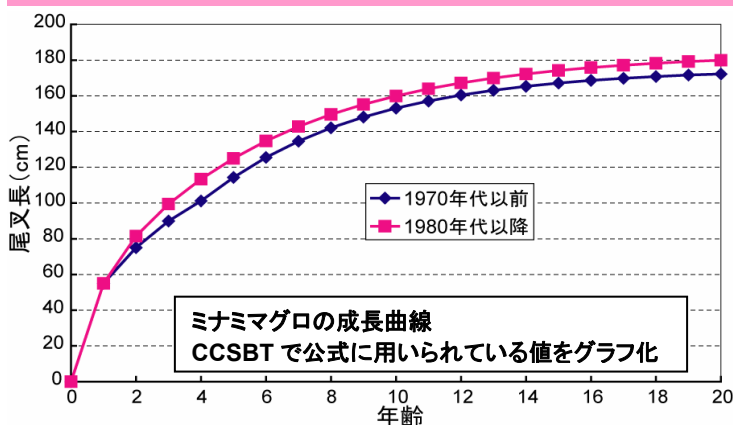
みなみまぐろ保存委員会 (CCSBT)
大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)
インド洋まぐろ類委員会 (IOTC)

生物学的特性

- 寿命: 20歳以上、耳石での最高齢は45歳
- 成熟開始年齢: 8歳
- 産卵期・産卵場: 9~3月、インド洋東部低緯度域
- 索餌場: 西風皮流域 (南緯40~50度の海域)
- 食性: 魚類・頭足類
- 捕食者: まぐろ・かじき類、さめ類、海産哺乳類

最近一年間の動き

近年の加入は低く、CCSBT 科学委員会は、漁獲を現状水準から直ちに削減するよう勧告し、年次会合では2007年のTACを3,115トン削減した11,810トンとすることに合意した。日本のミナミマグロ漁業管理に船別漁獲割り当て制度、漁獲全個体に対する識別標識装着制度が2006年4月から導入された。



利用・用途

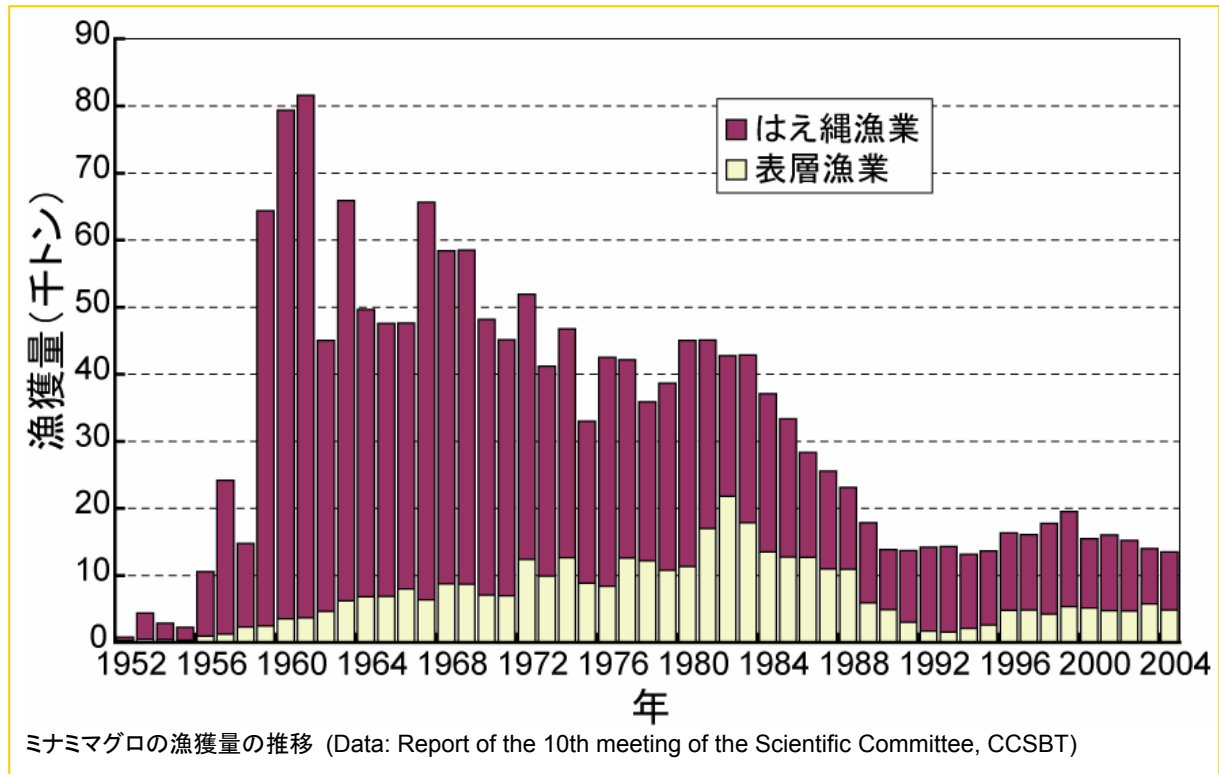
刺身

漁業の特徴

まき網を中心とした表層漁業と、はえ縄漁業とで漁獲される。表層漁業はオーストラリア沿岸で3歳までの小型魚を漁獲しており、近年は蓄養用種苗が中心である。それ以外は全てのはえ縄漁業で、公海域では日本、台湾、韓国船が、沿岸域でニュージーランド、オーストラリア、インドネシアが操業している。インドネシアの操業海域は産卵場に相当する。

漁獲の動向

表層漁業、はえ縄漁業とも1950年代初期に漁獲が始まった。表層漁業による漁獲は1982年に21,500トンに達し、その後は自主規制により激減したが、近年蓄養用種苗に漁獲を再開し年間約5,000トンを漁獲している。はえ縄漁業の漁獲量は1961年に最高の77,900トンに達したが、産卵場と小型魚の多獲される海域での操業自粛、TAC規制等で徐々に減少し、1989年以降は8,000~14,000トンの間でほぼ安定している。



管理方策

2007年漁期のTACは合計11,810トンで合意。加盟国分は日本3,000トン、オーストラリア5,265トン、ニュージーランド420トン、韓国1,140トン、台湾1,140トン。協力的非加盟国分はフィリピン45トン、南アフリカ40トン、EU10トン、オブザーバー国分はインドネシア750トン。韓国、台湾は自主的に1,000トンを上限とし、合計漁獲量は11,530トン以下となる。資源に例外的な状況が生じない限り日本は5年間、他国は3年間、このTACを維持する。

資源状態

親魚資源量は初期資源量よりはるかに少なく、CCSBTの管理目標の1980年水準や、MSYを与える水準よりもかなり低い。この10年間の加入量は1950～1980年水準よりもかなり低く、加えて2000年級、2001年級の加入はかなり低く、1999年級も低い可能性がある。現状の漁獲水準は、特に近年の低加入によって、資源をさらに減少させる可能性が高い。

資源評価まとめ

- 親魚資源水準は極めて低い
- 2000、2001年の加入が極めて悪く、1999年も悪い可能性が高い
- 新たなTACに基づいた漁獲量では長期的な資源回復が見込まれる。

資源管理方策まとめ

- 新たなTAC合意

ミナミマグロの資源の現況(要約表)

資源水準	低位
資源動向	横ばい
世界の漁獲量 (最近5年間)	13,000～16,000トン 平均: 14,900トン
我が国の漁獲量 (最近5年間)	5,770～7,855トン 平均 6,489トン